様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３７３０５１１

研究課題名（和文）「非集住地区」で生活する在日コリアンの個人化と帰属意識の変容に関する研究

研究課題名（英文）Zainichi Koreans under the indiviualized conditions and transformations of identities

研究代表者
川端　浩平（KAWABATA, Kohei）

関西学院大学・先端社会研究所・専任研究員

研究者番号：８０５６３９６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、いわゆるエスニックコミュニティではなく、郊外地域などの非集住的環境で生活している在日コリアンの若い世代に対する参与観察と聞き取り調査をもとに、彼・彼女らが経験する差別・排除の現代的諸相を明らかにした。在日コリアンの個人化は、在日コリアンの自然消滅や彼・彼女らのエスニック・アイデンティティの喪失を意味するものではなく、むしろエスニックなものへの希求が高まっていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify discriminations toward young Zainichi Koreans who mostly brought up in the suburban areas under the individualized environment based on the participant observation and interviews. It clarified that the individualization of Zainichi Koreans does not simply mean the natural extinction of their community nor loss of their identities. Rather, this study found out that they have strong aspirations toward their ethnic identities and it enable them to resist against discriminations in the everyday practices.

研究分野：社会学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：差別と排除　ナショナリズム　エスニシティ　地域社会

## １．研究開始当初の背景

本研究で主題としたフィールド調査を通じた在日コリアンのエスニシティの形成や差別の問題に関する事例研究は、これまで多数の研究者がとりくんできている。そして現在もなお、在日コリアンの生活スタイルとホスト社会の変容にともない改めて問われるべき再帰的な問題として重要である。若い世代を扱った研究においては、帰属感覚は均質的なものや民族性の喪失としてではなく、多様化もしくは混淆化したものとして捉えられるのが一般的である。

在日コリアン一世、二世が自己の負のイメージから解放されるものとしてアイデンティティ政治を利用してきたのに対し、若い世代は日常生活のなかから「柔軟なアイデンティティ」を編み出していることが指摘されている（金泰泳 1999）。また、戴エイカ（2009）は国民国家を枠組みにした存在としてではなく、過去・現在ともに歴史的・社会的に越境する生活世界を生きるトランスナショナルな存在として捉えようとする視座の重要性を説いている。このように多様化や混淆化、国境を越えた広がりを持つものとして捉えられてきた在日コリアンの若い世代の帰属感覚が、地域社会での日常生活においてはどのような変化を示しているのかについても関心が向けられてきた。地域社会という視座からの在日コリアンに関する研究では、大阪などの集住地区の調査から、ホスト社会や近隣住民との関係性や福祉等の問題が考察されている（谷富夫 1996、二階堂裕子 2008）。また、それぞれの地域社会で統廃合が進み縮小傾向にあるものの、例えば日本国内にある朝鮮学校出身者などにみられる「朝鮮学校コミュニティ経験」（韓東賢 2006）も地域社会での帰属感覚を育む拠点となっていることが明らかにされている。

しかし、調査上の困難さから、そのような集住地区から離れ、非集住的な環境で生活する在日コリアンの若者たちの実態は十分には把握されてはこなかった。戦後に軍需工場関連施設、被差別部落周辺地域、国鉄主要駅周辺等に形成された在日コリアンの集住地区は現在ではすでに溶解しており、日本人との結婚、日本国籍の取得、在日コリアンの郊外化といった状況が進展している。在日コリアンの若い世代に焦点を当てた場合、彼・彼女らはかつてのスティグマの対象であった共同体からは離れて、郊外の非集住地区を生活拠点とし、「個人化」したライフスタイルを享受している。コミュニティの溶解と矛盾するかたちでエスニックな帰属感覚への関心が高まるという再帰性を検討するうえで、集住地区よりも溶解し易い状況に置かれてきた「地方」の非集住地区は、エスニシティの問題が集団に対してではなくて個人に対して回帰してくることを考察するためのフロンティアとして位置づけることができる。

## ２．研究の目的

本研究の目的は、非集住的環境である「地方」（岡山）の郊外において「個人化」した環境で生活する在日コリアンの若者たちの帰属意識の形成と差別の現代的特徴を明らかにするとともに、地域社会における多文化的状況の現実を踏まえた差別や排除を乗り越えていくための理論と実践の方向性を検討することであった。集団的なエスニック共同体に対する差別から自由となったはずの若い世代に対する差別の実態を理解するために、エスニシティの問題が集団に対してではなく個人に対して回帰するという現象を解明することを以下のような観点から明らかにした。（１）非集住的環境におけるエスニシティの形成の内実を明らかにするために、郊外などで生活する在日コリアンの若い世代がエスニシティを形成していく際の準拠点や契機を明らかにすること。（２）日常生活のなかのナショナリズムや差別の現代的特徴を解明すること。参与観察とインタビュー調査によって、在日コリアンという集団にではなく、個人が経験する現代日本のナショナリズムの排除と包摂のメカニズムや日常生活で直面する差別の現代的諸相を明らかにする。（３）地域社会における多文化共生のとりくみを考察すること。上述した三つの研究成果を地域社会における多文化共生のとりくみにおける課題と関連づけることにより実践的な問題として考察する。とくに地域社会の行政・市民による多文化共生のとりくみが、大都市圏の集住地区における先駆的な事例を無批判に受け入れることにより内発性が損なわれていることの弊害に関する考察を深める。

## ３．研究の方法

（１）岡山の非集住的環境で生活する在日コリアンの若い世代を対象としたフィールド調査を行った。調査方法は個人への聞き取り調査と対象者の日常生活（職場・学校・余暇など）への参与観察および地域社会の在日コリアンのコミュニティの変遷に関する聞き取り調査を実施した。

（２）岡山での 10 年以上におよぶフィールド調査のネットワークと経験を活かし、効率的に研究を進めるために研究環境の整備を進めるとともに、地域社会をフィールドとした差別と排除の研究体制とネットワークを構築するなかで研究を継続した。

（３）岡山での非集住的環境で生活する在日コリアンの実態を相対化していくうえで、大阪・兵庫・京都・広島で生活する在日コリアンの若い世代の聞き取り調査を実施した。

（４）これまでの調査から、在日コリアンの若い世代が自らのエスニックなアイデンテ

ィティに目覚める契機の一つが、祖国への留学をめぐる語りであった。そのことから、今日の若い世代へのエスニシティなるものへの回帰のリアリティを把握するうえで、ソウルで生活する在日コリアンへの聞き取り調査を実施した。

（５）本研究の成果を、①著書および学術論文、②国内外の学会および研究会での発表、③行政・大学・民族組織等との連携によって開催するワークショップ等での報告による地域社会への研究成果の還元等によって示すとともに、研究者および地域住民からのフィードバックを得た。

４．研究成果

（１）非集住的環境における在日コリアンの若い世代へのインタビュー調査を行った。当初の計画通り、これまで調査を行ってきた岡山市と倉敷市の朝鮮総聯の下部組織である①在日本朝鮮青年同盟、②在日本朝鮮青年商工会、③在日本朝鮮留学生同盟と民団の下部組織である④在日本大韓民国青年会、⑤いずれにも属さない在日コリアン、さらには２００３年度から研究代表者が代表を務めている多文化共生を目指す市民グループである⑥ダイアローグ岡山(福武文化教育財団支援事業)に参加している若い世代の在日コリアンの中から、非集住的環境で生活している者を選定してインタビュー調査を実施し、豊富なデータが得られた。

（２）とりわけ本研究において重要だと考えられる上記（１）⑤の調査対象者を獲得するために、他の調査対象者にスノーボールサンプリングの要領で紹介してもらい、聞き取り調査および参与観察を実施した。その結果、民族組織等に頼る通常のトップダウン型のネットワークからは浮かびあがってこない、エスニック・コミュニティや民族組織等とは関係性が希薄化している非集住的環境で生活する今日の若い世代の在日たちの現状をめぐる聞き取りのデータを収集することが可能となった。

（３）多文化社会研究会（代表者：岩渕功一【豪モナッシュ大学】）のメンバーと行った共同の研究調査を通じて、本研究課題でもある在日コリアンのダブルの若者の帰属意識の形成に関する聞き取り調査および参与観察を行った。半構造化された質問票をもとに様々なエスニシティを背景に持つ人びとに対して聞き取り調査を行い、それらのデータを、欧米系の「ハーフ」や日系ブラジル人などの異なったエスニシティ間におけるアイデンティティ形成や差別の現実に関する比較的検討を行った。

（４）上記（３）の調査を実施することにより、在日コリアンとパートナシップにある日本人との関係性に着目した参与観察およびインタビュー調査を実施することができた。その結果、通常の社会調査からは見えにくい、家族という親密な関係性のなかで育まれる多文化的な実践や共生の在り方への考察を深めることが可能となった。

（５）岡山以外の地域における在日コリアンの調査も同時に実施した。特に、上記（３）の調査に関連して、京都・大阪・兵庫の関西圏とともに、広島におけるフィールド調査を実施して、在日コリアン・ダブルの人びとへの聞き取り調査を行った。

（６）３週間ソウルに滞在し（２０１２年８月)、ソウルで就学や就職のために滞在している在日コリアンの若い世代への聞き取り調査および参与観察を実施した。若い世代の在日コリアンで自らのルーツやアイデンティティへと目覚める者の語りのなかに現れる祖国への留学経験が当事者たちにもたらす意味等の考察を深めることが可能となった。

（７）オーストラリアの首都キャンベラにある戦争博物館(War Memorial)において歴史アーカイブ調査（オーストラリア進駐軍による岡山の在日コリアン等をめぐる動向に関する記録資料）を実施し、データを収集した。これらのデータから、国内の書籍・資料からは見えてこない、戦後直後の岡山における在日コリアンの動向や日本政府や占領軍による位置づけを明らかにすることができた。

（８）上記（１）で言及したダイアローグ岡山の活動では、２０１１年～２０１２年度にかけて朝鮮学校ダイアローグというイベントを実施した。旧岡山朝鮮初中学校の校舎を利用して、社会学者・アーティストおよび地域住民が参加した。このイベントにおいても本研究成果を報告することにより、当該研究の成果を地域社会へと還元することに資することができた。
（http://www.artdialogue.jpn.org/）

（９）これまでの岡山での調査を単著『ジモトを歩く――身近な世界のエスノグラフィ』としてまとめ、その合評会を岡山市と倉敷市において二度実施することにより、本研究成果を地域社会へと還元することに資した。

（１０）本研究から得られた成果を国内外の国際ワークショップにおいて英語で報告することにより、国際発信するとともに他国のエスニック・マイノリティを専門とする研究者との議論を通じて本研究を国際的な観点から相対化することが可能となった。具体的には以下の国際ワークショップにおいて報告した。

① Kawabata, Kohei, “Transforming Representations of Ethnic Minority/ Enclaves: A Case Study of Young Zainichi Koreans in a Regional City of Japan",ユバスキュラ大学・京都大学共同ワークショップ、京都大学、2011 年 5 月.

② Kawabata, Kohei, “The Future of Japanese Studies: An Alternative Approach to Illuminate Locality”, The 10th Japanese Graduate Summer School 2013, The Australian National University, January 2013.

③ Kawabata, Kohei, "Transforming Representations and Identities of Zainichi Koreans in Contemporary Japan", Multiculturalism in East Asia 3rd workshop at Nagoya, Nagoya Garden Palace, 29-30 June 2013.

**５．主な発表論文等**
**（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）**

〔雑誌論文〕（計６件）

① 川端浩平、「フィールドの動態性と混淆性を捉える――「流れ」と「渦」という観点から」、『観光科学』第 5 号、琉球大学大学院観光科学研究科、査読無、2013 年、86－87 頁.

② 川端浩平、「越境からジモトへ」、『ジモトという視座――身近な世界を／から批判的に読み解く』、GCOE Working Papers 次世代研究 102、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」、査読無、2013 年、3－28 頁.

③ 川端浩平、「ジモトという視座――身近な世界を／から批判的に読み解く」、『方法としてのジモト――地域社会の不可視化された領域をめぐるフィールドワーク』、GCOE Working Papers 次世代研究 91、京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」、査読無、2012 年、4－20 頁.

④ 川端浩平、「二重の不可視化と日常的実践――非集住的環境で生活する在日コリアンのフィールドワークから」『社会学評論』250 号、査読有、2012 年、203－219 頁.

⑤ 川端浩平、「不可視化されるマイノリティ性――ジモトの部落、在日コリアン、ホームレスの若者たちの研究調査をめぐる軌跡から」『解放社会学研究』25 号、査読有、2012 年、91－112 頁.

⑥ 川端浩平、「＜祖国＞で紡がれる在日物語――ソウルで生活する在日コリアンの若者の語りから」『京都エラスムス計画成果論文』、京都大学、査読無、2011 年（全 8 頁）.

〔学会発表〕（計１件）

① 川端浩平、他、「差別・排除空間のフロンティア――ジモトのフィールドワークの軌跡から」（若手企画テーマ部会）、第 85 回日本社会学会大会、札幌学院大学、2012 年 11 月 3 日.

〔図書〕（計４件）

① 川端浩平（共著）、他、『＜ハーフ＞とは誰か――人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社、2014 年、21 頁（222－242 頁）.

② 川端浩平（単著）、『ジモトを歩く――身近な世界のエスノグラフィ』御茶の水書房、2013 年、282 頁.

③ 川端浩平（共著）、他、『フィールドは問う――越境するアジア』関西学院大学出版会、2013 年、20 頁（85－104 頁）.

④ 川端浩平（共著）、他、『現代エスノグラフィー――新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社、2013 年、8 頁（182－189 頁）.

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
川端　浩平（KAWABATA, Kohei）
関西学院大学・先端社会研究所・専任研究員
研究者番号：80563965

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：